

日本語学・日本語教育学部会

【概要】

佐藤 文*、サクンクルー・カンシニー**

日本語学・日本語教育学部会は、12月11日(火)午後13時40分から16時30分まで文教育学部1号館大会議室にて行われた。

前半の日本語学部会では、研究員1名、大学院生1名、後半の日本語教育学部会では、教員1名、大学院生1名、Honours1名による研究発表が行われた。以下、それぞれの発表内容をまとめ、報告する。

1. 池田來未(お茶の水女子大学大学院生) 「複合動詞「～トオス」の史的変遷—文化化に着目して—」

池田氏は、前項動詞の種類に着目して複合動詞の用法の変遷について研究を行っている。今回の発表では、「トオス」を後項にとる複合動詞(以下「～トオス」)について上代から現代の用例をもとに用法の歴史的変遷を調査報告された。「～トオス」は大きく〈貫通〉(「刺し通す」など)→〈通過〉(「見通す」「引き通す」など)→〈一貫継続〉(「読み通す」など)の順に、「通す」の語彙的意味を多く残した用法からアスペクト的意味を持つ用法に変化してきたことが明らかになった。また、どの用法においても前項の動詞には動作の側面のみをとらえる動詞(主体動作動詞)が来やすく、これはどの時点においても動作が成立しうる「非内的限界動詞」であることが示された。質疑応答では、用例を採集する作品の性質についての指摘や

連濁している複合動詞との差異についての議論がなされた。

2. 朴美賢(釜山大学校日本研究所研究員) 「『新日本紀』における韓国系固有名詞の声点について」

朴氏は、日本書紀の用字法や韓国系固有名詞のアクセントについて研究を行っている。今回の発表では、13世紀末に成立した日本書紀の注釈書である『新日本紀』の巻16から巻22の「秘訓」における韓国系固有名詞を取り上げ、概要を紹介するとともに、古写本との関連、中国中古音および日本呉音・漢音との関連について報告された。韓国系固有名詞の声点のうち圈点を対象に調査した結果、中国中古音をそのまま反映しているとも、日本呉音、日本漢音から一方的に影響を受けているとも言えないことがわかった。また、平声に加えられる傾向が高く、日本書紀古写本の声点との一致率が高いことから、『新日本紀』の声点は古写本の量的不足を補う資料として利用価値があることを指摘した。質疑応答では、『新日本紀』の成立年代の日本語アクセントや声点の付された時期の影響という新たな観点からの意見が出された。(日本語学部会 佐藤文)

3. 奥西麻衣子(お茶の水女子大学大学院生) 「普通体基調会話における日本語学習者の丁寧体使用に関する一考察」

奥西氏は、普通体基調の接触場面会話における日本語学習者の丁寧体の使用に注目し、日本語学

*お茶の水女子大学大学院生

**お茶の水女子大学大学院生

習者に見られる基調スタイルが普通体から丁寧体へ一時的にシフトする現象「アップシフト」にはどのような特徴があるかを明らかにされた。

その結果、まず、アップシフトの生起頻度については、日本語学習者全員にアップシフトが見られた上、日本語母語話者よりアップシフトの頻度が高いことが報告された。観察されたアップシフトは日本語母語話者にも見られる規範的な「無標アップシフト」および日本語学習者特有の「有標アップシフト」に分けられ、ほぼ全てが有標アップシフトであると述べられた。有標アップシフトが多数使用された要因として、日本語学習者の日本語能力の不足といった言語的要因、および相手へのフェイス侵害を避けるためといった言語外的要因が挙げられた。アップシフトの特徴や使用された要因を明確に考察するために、今後さらに実例を集め、対象者である日本語学習者に使用意識調査を行うことも必要であることなどが指摘された。

4. ジェシカ・レウン（ニューサウスウェールズ大学Honours）

「日本語学習者のメール文に見られる『断り』」

ジェシカ氏は、英語を母語とする日本語学習者の断りのメール文をデータとし、日本語学習者と日本語母語話者には、どのような違いが見られるのか、また言語的・文化的差異をもとにした「プラグマティック・トランスファー」による影響があるのかを明らかにすることを目的とするものであった。

本研究では、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」を資料に断りのメール文における意味公式の使用・内容・言語形式を分析された。分析の結果、日本語学習者が使用していた言語形式の種類と丁寧度に違いが見られ、言語形式の種類については日本語学習者が日本語母語話者より使用していた種類が少なく、丁寧度については日本語学習者の方が低かったこ

とが明らかにされた。このことから、日本語学習者の断りのメールには学習者の母語からのプラグマティック・トランスファーが見られた。つまり、その違いは学習者の母語によって影響された可能性があると考えられた。

5. トムソン木下千尋（ニューサウスウェールズ大学教授）

「I-JASデータの社会文化的考察」

トムソン氏のご発表は、国立国語研究所による「International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS)」データはどのようなものか、どのような社会的相互行為により、どのような言語がデータ収集を媒介したのかについて、I-JASの英語母語話者、中国語母語話者、日本語母語話者の対話データを用い、社会文化的視点で考察されたものである。

I-JASのデータ収集プロセスは、研究のためのデータ収集といった本来の機能のほか、日本語学習者に日本語母語話者とのコミュニケーションの機会を提供しているという裏の機能にも埋め込まれていたと説明された。さらに、I-JASデータは調査者と日本語学習者の両者によって共構築されたものであり、調査者と学習者のその時、その場所での相互行為から生まれたテキストの集まりである。I-JASデータは普通の「自然な日本語」ではなく、そこには、「日本語」、「The Japanese」はないということを明らかにされた。

以上、日本語教育学部会における1名の先生によるご講演、および2名の大学院生による研究発表についてまとめた。異なる背景を持った人たちが集まり、研究を通して交流が行われた非常に有意義な会であった。今後も分野、機関、国を超えた交流が期待される。（日本語教育学部会 サクンクルー・カンズィニー）

